

野田正明：モニュメント創作における進化

大 前 勝 信

はじめに

福山市新市町出身の現代美術家、野田正明（Noda Masaaki, 1949-）は、1977年にアメリカ・ニューヨークへ渡って以来、日本と行き来しながら制作活動を半世紀近くにわたって続けてきた。なかでもモニュメントは、1997年、京阪電鉄宇治駅（京都）南入口来迎壁にあるステンドクラス作品《飛翔》（図1）から2024年に野田金属工業株式会社（東大阪）に設置した《進化と革新》（図2）まで、31点の作品を国内外に設置してきた。

本稿は、野田がモニュメント制作に至った経緯をはじめ、ステンレスを中心とする造形表現の展開について考察したい。



（図1）《飛翔》（1階《去来、流転》、2階《天空昇》） 1997年



（図2）《進化と革新》 2024年

1. 彫刻との出会い

野田正明は、1972年、大阪芸術大学卒業前の信濃橋画廊（大阪）で個展デビューした。その個展で知り合った大阪出身の画家、河野芳夫（1921-1999）との出会いをきっかけに、シルクスクリーン版画を制作していた。1977年、ニューヨークへ渡航し、2年後には、ボストンの全米版画展で《次元6-J》（図3）が買上賞となり、10軒の画廊からオファーを受けるなど、アーティストとしての生活も軌道に乗り始めていた。

1980年代初頭は、ネオ・エクスプレッションイズムが台頭してきた時期であった。この頃から野田はアートの原点を見極めるべく、ミニマル・アートから古典へと回帰していった。



（図3）《次元6-J》 1979年

画中にみられる躍動感のある有機的な波状の形は、ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー (Joseph Mallord William Turner, 1775-1851) の水彩や油彩画作品から光の中の色彩・空気による実在的、深層空間としてのリアリティーの影響を受けたものであった。また、アート史を考察する過程でマルセル・デュシャン (Marcel Duchamp, 1887-1968) からレオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci, 1452-1519) の思想や素描集を探究していった。

野田は、ターナーの描いた大気の表現を参考に、それまでのシルクスクリーン版画による技法では例をみない、水彩画のような滲んだ効果を作り出した。流れるような色彩と吸いこまれるような異次元の空間世界は、100色を超える刷りを経た複雑で微妙なボカシや透明な色彩表現によるものであった。この時代は、《永久運動》(図4)のようにダ・ヴィンチの描いたパラシュートの素描をもとに、波状のフォルムのなかに立体的なコーン状の図形を象徴的に表した。後の野田のモニュメントを予兆させるイメージの版画世界を構築した。



(図4) 《永久運動》 1980年

当時の野田は、ヨーロッパ諸国の版画コンペも積極的に出品していたが、版画制作に傾倒することへの懸念も感じていた。それは、シルクスクリーン制作において、油性インクの希釈、洗浄に揮発性の有機溶剤を多用していたことから、自身の健康に影響を感じていたことをはじめ、ニューヨークの美術市場において版画の需要が減るとともに、版画を専門に扱う画廊が次々と姿を消していくことを感じ取っていた。さらに版画家としての活動が、アメリカアート界でのメディアによるヒエラルキーを如実に実感し、自身のイメージするものと乖離していたことなどがあった。

この頃から野田は版画から絵画制作へ制作の比重を置いていった。また、一方で学生時代から憧れていた彫刻制作にも関心を寄せていった。

1982年、野田は、ニューヨークで開催された「国際空中アートの交響(空中彫刻)展」へ参加することで、その契機をものにした。野田の参加を知ったナム・ジュン・パイク (Nam June Paik, 1932-2006) は、空中彫刻家のオットー・ピーネ (Otto Piene, 1928-2014) とコラボをするように紹介状をしたためて支援した。

この祭典は、アメリカとオランダの友好関係200年祭のアトラクションとして、レインボーアートファンデーションが主宰したものであった。出展にあたっては、オランダ出身のウィレム・デ・クーニング (Willem de Kooning, 1904-1997) はじめ、イタリア、マレーシア、インドなど5ヶ国から、あわせて11名の美術作家が彫刻家に限らず招待された。

デ・クーニングは、ジャクソン・ポロック (Jackson Pollock, 1912-1956) やマーク・ロスコ (Mark Rothko, 1903-1970) らと並ぶ、20世紀抽象表現主義を代表する画家である。本祭典では、デ・クーニングの空中彫刻をメインとしたもので、彼の絵を拡大して空中へ浮かばせる事業であった。

野田の作品は、4個の気象観測用のバルーンとパラシュート布、グラスファイバーを素材にした作品(図5)であった。セントラル・パークの天空へと舞った作品は、アメリカ星条旗を彷彿させる、赤や青、白の鮮やかな色彩の帯で話題を呼んだ。ニューヨーク・タイムズ(図6)には、以下の小見出しで浮遊する空中彫刻の写真とあわせて報道された。

デ・クーニング・イン・ザ・パーク

ウィレム・デ・クーニングが土曜日の正午、セントラル・パークのシープ・メドウにやってくる。11人のアーティストが参加して、膨らませたソフトな彫刻の空中ショーを行う。デ・クーニング自身の作品は20フィート×25フィートの空の帆。レインボー・アート財団がこのイベントを後援している。他のアーティストは、マレーシアのドリー・ユニサン、アメリカのマーティ・ローウェル、ヴェラ・シモンズ、エドガー・カワンズ、リック・キナリド、リッサ・パパジアン、ピーター・ディーン、インドのタリク、日本の野田正明、イタリアのルチオ・イゾラーニ。シープ・メドウは公園の西側、65丁目の横断歩道の北側にある⁽¹⁾。



(図5) 国際空中アートの交響 (空中彫刻) 1982年



(図6) 「ニューヨーク・タイムズ」国際空中アートの交響 (空中彫刻) 1982年

この祭典をととして野田は、著名な作家たちの作品に刺激を受けるとともに、彫刻を浮かばせるために関わった技術者たちとコラボレーションの重要性を感じとった。

野田は、この頃から厚紙などを用いて小品の彫刻を継続的に試作するようになった。当時、30代半ば頃の野田は、版画家としてキャリアを築く一方、《位相》(図7)にみられる4メートルを超える大作ドローイング(木炭画)を数多く描いていた。これらの作品は、超自然世界の複雑な大気や無限空間を表現したいという思いを強く表したものであった。また同時に、自身のイメージを具現化する足掛かりとして、厚紙で彫刻の試作を行った。その他にも、当時は未発表ながら、表現の可能性を多角的に追求すべく1987年から具象画を巧みに構成したコラージュ(図8)を始めるなど、試行錯誤を繰り返していた。



(図7) 《位相》 1987年



(図8) 《視覚》 1987年

野田は、版画、ドローイング制作の領域だけに安住することなく、その後も画家としてアクリル絵具、不透明水彩（グワッシュ）などの画材も積極的に取り入れて制作に励んだ。やがて野田は、空間的な絵画作品を描くうちに、平面で表現しきれないところを立体で表そうと彫刻制作にのめり込むこととなる。この一連の制作スタンスがやがて彫刻作品、モニュメントへとつながっていった。

野田は、知り合いから紹介された、メタルワークやモニュメント制作で定評のある株式会社西田亀（図9）（京都）をはじめ、医化学機器の製造業を出発点として2025年に創業100年を迎える八木製作所（図10）（京都）で彫刻制作のノウハウを学んだ。国外においては、ニューヨークのブルックリンで活動する彫刻家のアトリエ（図11）で真鍮の溶接や着色の技法を直接教わった。



（図9） 彫刻制作の初め頃 西田亀（京都）にて
1990-1993年



（図10） 八木製作所（京都）にて
1999年



（図11） 彫刻の着色作業（ニューヨークの
ブルックリン）にて 2000年

見る角度によってさまざまに変化する彫刻に魅せられた野田は、これらを端緒にブロンズ、真鍮、コールドステン鋼、ステンレスといった金属類をはじめ、御影石、ガラスなど彫刻で用いられる材質にも興味を持ち始めた。この頃に制作した、『はるかに-SN』（図12）、『流体-Ⅱ』（図13）は、板状の金属片が複雑に絡み合っている。材質の特徴では、無機質で冷たい印象を与える銀色のステンレスを、本作のように自然の摂理や森羅万象のイメージを造形的に転化させようと試みていることがわかる。

1995年には、後に2メートルに近い大型のレリーフ作品『覚醒-4』（図14）の下地となるモデルを制作するまでに伸展する。この覚醒シリーズ⁽²⁾は、フランク・ステラ（Frank Stella, 1936-2024）のインディアン&エキゾチックバードシリー

ズ⁽³⁾を想起させるが、野田はステンレスの表面にグラインダーによるスクラッチを描画のように施すなど、絵画的に独自の要素を加えている。



（図12）『はるかに-SN』 1988-1993年



（図13）『流体-Ⅱ』 1996年



（図14）『覚醒-4』 1996-2002年

これらの作品は、1999年、ニューヨークの70th アート・ギャラリーの個展で初めて発表した。この個展では、新作の鏡面仕上げのステンレスや真鍮の彫刻とともに、水彩、アクリルによる絵画が初めて展示された。この個展で野田は、平面と立体が互いに交感しあう作品表現から「空間のコンダクター⁽⁴⁾」と称されるなど、新境地を示す意欲的な内容であった。

この頃の野田は、ケネス・スネルソン (Kenneth Snelson, 1927-2016) と知り合い、野外に設置されるパブリックアート、とくにパーマネントとして設置されるモニュメントの社会的な重要性を感じていた。彼のスタジオは、野田の自宅から3ブロック離れたところにあった。

スネルソンは、テンセグリティ構造という引っ張る力と圧縮する力によって均衡を保たれる構造を創作し、モニュメント、オブジェなどを制作してきた抽象彫刻家であった。彼のモニュメントは、デジタル絵画によって描き出された構想画に基づき、ワイヤーでステンレスのポールを何本も空中に固定する絶妙なバランスを保っている。その典雅な造形物は、世界各地に設置されている。

野田は、彼と日本で同じ画廊に所属していたことが縁で、サリバンストリート (Sullivan Street) にあるスネルソンのスタジオに通い、交流は晩年まで親密に続いた。野田はスネルソンからステンレスのモニュメントの魅力を感じとった。後年、野田がモニュメントの制作を依頼された際には、実際に使用するステンレスの材質の吟味や制作の工程などの確かなアドバイスを彼から受けたという。

2. モニュメント制作へ

野田にとって最初のモニュメントは、突然の依頼から始まった。1997年、京阪電鉄宇治駅南入口来迎壁に設置したステンドグラス作品、《飛翔》(図15)であった。これは、宇治駅を設計した建築家・岩野正英 (1950-) が1991年に阿部出版発行の『野田正明作品集 MASA AKI NODA The Works in New York 1980-1991』に注目し、駅舎の壁面に「野田作品のイメージを意匠として取り入れたい⁽⁵⁾」との申し入れを受けて実現したものであった。

依頼主は、野田の版画作品にみられる流体を意識した表現が、ステンドグラスのモニュメントとして映えることをイメージしたのだろう。制作に先駆けて野田は、メトロポリタン美術館にあるティファニーのステンドグラスを研究した。

野田は、寺社仏閣で有名な宇治市から日本を代表する国宝、平等院鳳凰堂の雲中供養菩薩像を抽象的に昇華させた《天空昇》と《去来、流転》のイメージを上下2面で考案した。下段は、下界の混沌とした世界を表し、上段は文字通り天に昇る菩薩の像容を象徴的に表現したものをイメージ図として仕上げた。野田は、幅6メートルを超える原寸大の図面をニューヨークの自宅に持ち込んだ。そして光を実際に当てた時の効果を考え、色を囲む線の幅なども細かく分けるなど綿密な図面を描き起こした。このモニュメントでは、色彩の諧調と重層空



(図15) 《飛翔》、《天空昇》(上)《去来、流転》(下)
1997年

間を表現するため色数が63色となり、取り付ける板ガラスも5,000パーツに及んだ。野田のモニュメント初仕事の意気込みを十二分に発揮した。

このステンドグラスのモニュメントは、除幕式に参加していた当時の新市町長、藤原平氏をはじめ多くの人の目に留まり、その後のモニュメント制作依頼を受ける契機となった。

3. 野田邦雄氏との出会い

野田は、先般の宇治駅モニュメント設置からほどなく郷里の新市ライオンズクラブより35周年記念として、モニュメント制作の依頼を受けた。

1998年より、野田は新市のランドマークとしてふさわしい造形を本格的に模索し、全高6メートルの彫刻モニュメント制作を目指した。まずは、手のひらに収まる紙製の試作(高さ15センチ程度)を日課のように制作した。イメージが固まってくると、3点程に絞り込み、銀色のスプレーで吹き付け塗装を施し、全体のイメージを確認するということを繰り返した。この作業は、自身の思い描く理想的な造形イメージを探りよせるものであった。

野田は、京都市の八木製作所で紙製の試作原型をもとに、ステンレスによるマケット(高さ50センチメートル)を制作した。ただし、実際の大型モニュメントは、大きすぎて同製作所では制作出来ないことから、関西を中心に工場4社を訪ねてまわった。しかし、その複雑な形状から、コンピュータによる3次元解析でも加工が困難と判断され、制作も暗礁に乗り上げた⁽⁶⁾。

野田は、この事態に際して、この果敢な挑戦に応えられる業者を探し求めて辿り着いたのが、モノづくりのまちで有名な東大阪市にある、野田金属工業株式会社(以下、野田金属)であった。同社は、曲げ加工での実績から国内外で高い評価を得て、建築用金属製品をはじめ、他では出来ないものを単品から受注して製作している会社であった。

同社の野田邦雄社長(当時)(図16)に出会ったのは、1999年であった。野田によれば、野田社長(以下相談役)の最初の言葉が「社員の意識を変えてください。個々の社員が自分で考え、行動し、自主性を持つようになって欲しい⁽⁷⁾」と言われたという。

野田金属では、野田との話し合いによってマケットの微妙な曲面のアールを計測して数値化して、加工指示書(バラ図)を作成し、CADによってまとめあげた。野田の作り出した複雑な形態を平面図におとす手法は、この時に確立したのであった。

曲げ加工においては、使用するプレスブレーキという機械(図17)を用いて、コンピュータに



(図16) 野田邦雄氏(右)と野田正明／野田金属工業株式会社(東大阪) 1999年



(図17) 曲げ加工 野田金属工業株式会社にて

よる自動制御の加圧に加えて、それ以上の精度で曲げ角度が出せるように職人の経験と技術、独自のノウハウを生かしている。サイズにおいては、野田金属では6メートルまで曲げることが可能であったことから、大型のモニュメントも生み出された。

モニュメントは、厚さ4ミリのステンレス (SUS316) の鋼板を用いて、巧みに湾曲させ、組み合わせさせている。野田は、モニュメントの重厚さにかなった形にするため、紙型を用いて側面や裏側の接合箇所に実際にあててみるなど、十分に検討したうえで取り付けられた。制作の段取りも、野田相談役をはじめ、スタッフとコミュニケーションを交わしながら、共同で作りあげていった。

野田相談役は、2024年12月に逝去されたが、後継者によってモニュメントの制作を今も引き継いでいる。同社は、創業以来、「出来ないといわない、どうしたら出来るかを考える⁽⁸⁾」が理念であり、モニュメント制作を通して、モノづくりの本質と意識が変わっていくことを体現した。野田金属は、メディアにも取り上げられ、全国の学校、企業から見学者が絶えず訪れている。

4. モニュメントの多様性

野田は、野田相談役との出会いから1年後の2000年、広島県芦品郡新市町（現在、福山市新市町）の福戸橋北詰国道486号線交差点に、ステンレス製の彫刻《飛翔Ⅱ 時空を超えて》（図18）を設置した。野田のイメージどおり、高さ3メートル、六角形の御影石台座を合わせると6メートルの高さとなる立体モニュメントとなった。外観は、ステンレスの反りを意識した形態で近くから見上げると中央から張り出した鋼材が、刀剣のように鋭く天へと伸びている。見る角度によって飛翔しようとする鳥に見えたり、立ち上る炎に見えたりと千変万化する。「時空を超えて」という言葉は、今の子どもたちから未来の子どもたちへと世代を超えて引き継がれていく時間や空間を示している。

2000年以降、野田は福山市内をはじめ、中国（深圳）、ギリシャ（デルフィ、マラトン）など、公共モニュメント設置を作品制作の傍ら積極的に行っていた。

《創生》（図19）は、2002年に制作した作品で2009年11月、新山洋史氏の寄附により、ふくやま美術館のモニュメントとして設置した。高さ3メートルで、黒御影石の円柱土台の上に12枚のステンレスの円が交差している。円形に開いた穴からは、福山城天守を借景として臨むことができる。鏡面状に磨き出された表面は、正面から近くへ寄って仰いでみると、顔が映り込むような曲面になって



（図18）《飛翔Ⅱ 時空を超えて》 2000年



（図19）《創生》 2002年

いて、作品に包みこまれるような錯覚すら感じさせる。さらに、美術館の鏡面ガラスがモニュメントを映し出し、3つあるようなイリュージョンの世界を醸し出している。

2001年、中国現代アートを推進する企画展として野田のニューヨークのスタジオで作品を見に来ていた深圳美術館の学芸員は、その内容に興味を示してアメリカ作家のグループ展から野田の個展に予定を変更した。これが中国にモニュメントを設置するきっかけとなった。2003年11月、「日中平和友好条約締結25周年記念 野田正明1973-2003」の開催にあわせて同美術館の中央庭園にモニュメント《飛翔 VI 天空昇》(図20)、高さ3.4メートルを設置した。恒久設置となったこのモニュメントの無限的な円環の造形は、自然や建築物と新たな空間のかかわりを生み出し、好評を博した。

野田と30年来親交のあるギリシャ人のアートディーラー、タキス・エフスタシュウは、深圳での反響の大きさに注目して、ギリシャ・デルフィのヨーロッパ文化センターへアジア人として初の作品制作の依頼を取り付けた。

また、彼は、1995年にフランスのアンティープで野田の個展を開催した際、野田を故郷のギリシャに招き入れ、ギリシャのレフカダ島やデルフィなどを案内した。

古代ギリシャ彫刻を目の当たりにした野田は、荘厳な彫刻の神話性と理想的とも言えるリアリズムに圧倒されつつも、ギリシャでのプロジェクトを進めるうちに、芸術的普遍性を造形の中に見出した。野田は、自身のモニュメントに数千年の時代を超える精神性が必要と考えるようになる。

2005年2月、野田は、ギリシャのアポロ神殿に隣接する国立の文化機関、デルフィ・ヨーロッパ文化センターでアジア人初の個展を行い、同センターの彫刻公園に《アポロの鏡》(図21)を設置した。同公園は、600メートルの眼下には地中海があり、これまでフランス、イタリア、アメリカなどの他国作家の彫刻はなく、野田の作品は、海外作家唯一のモニュメントとして設置された。このモニュメントは、ギリシャのギャラリーガイドの表紙となり、2ヶ所での個展開催もあって盛り上がりを見せた。これがギリシャでの大きな一歩となった。

これを受けて、ふくやま美術館では、2006年1月に「野田正明展 ニューヨークからのメッセージ」を開催した。この展覧会に際して野田は、《可能性》をはじめとするブロンズ作品を制作(図22)した。鳥の飛翔や流体のスピードなど、ダイナミックな造形を昇華したこれらの作品は、ブロンズという素材を通して、より有機的な形態へとつながっていった。



(図20) 《飛翔 VI 天空昇》 2003年



(図21) 《アポロの鏡》 2005年



(図22) 鑄造した作品の確認 高岡市内の工房にて 2005年

野田の湧き上がる造形のイメージを、もっとダイレクトに表現したいという思いは、マケットにおいても紙に加えて石粉粘土での造形も加わった。これらの小さなマケットは、モニュメントの造形においても、新たな境地を導き出した。

2010年9月、野田は、マラソン市長より記念碑制作の依頼を受けて《ヘルメスの精神》(図23)を設置した。この年は、マラソン発祥につながる「マラソンの戦い 2500周年記念」にあたっていた。モニュメントの高さは5メートルあり、アテネマラソンのスタート地点でもある競技場の屋外遺跡隣に設置された。本作は、ギリシャ神話のヘルメス神をイメージした躍動感あふれる造形で、力強く走るランナーや軽やかに羽ばたく鳥にも見える。

このように、野田のモニュメントは、鏡面による独自のルミニズムへと発展し、海外での評価を高めていった。



(図23) 《ヘルメスの精神》 2010年

5. ラフカディオ・ハーンのモニュメント

野田は、時代を超えた精神性を求めて、「怪談」などの著作で知られる小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）に関心をもつようになる。そして、ハーンの生誕地を訪れるなど、彼の足跡を調べる内に、自身のアートの深化と東西の文化交流に目覚める。

野田は、ハーンのひ孫である小泉凡館長（小泉八雲記念館）と共にギリシャ、アメリカ、日本、アイルランドと続いたアートと文化の交流プロジェクトに関わることで、八雲復興、再ブームのきっかけとなり、モニュメント設置へ展開した。

野田が60歳を迎えた2009年10月、「日本ギリシャ110周年友好記念」にアテネのギリシャ・アメリカン大学のキャンパスへ《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》(図24)の彫刻設置とあわせてハーンをテーマにした展覧会が開催された。翌年10月には、「小泉八雲来日120周年」を記念して、松江城天守閣で展覧会が開催され、島根県立美術館の湖側にある岸公園にアテネと同型の彫刻、《小泉八雲の開かれた精神》(図25)が両国で呼応するように設置された。このステンレス彫刻は、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）をテーマに制作したものである。異なる方向の曲線は、東洋と西洋を表し、中央で交差する開口部のハート形は、東西の和合とハーンの寛容の精神を象徴したものであり、ハーンの差別や偏見のないものの見方、「共生」の精神を象徴したものであり、数奇な人生を物語っている。ちなみに、この場所は、夕日を愛したハーンに因んでモニュメント中央部のハート型の空間に夕陽が入るように設置された。



(図24) 《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》小泉凡氏(左) 2009年



(図25) 《小泉八雲の開かれた精神》 2010年

2014年には、「小泉八雲没後110周年」を記念して、レフカダ・カルチャー・センターに《ラフカディオ・ハーンと開かれた精神のオデュッセイア》高さ2.2メートルを設置した。「オデュッセイア」とは、詩人ホメーロスの作として伝承された古代ギリシャの長編叙事詩である。モニュメントの造形は、ハーンの生地からその後の彼の苦難の旅の始まりを示唆したもので、上部の羽を大きく広げている。ハーンが世界へ羽ばたいていくことを予兆したものである。

2019年10月、《無限の未来—小泉八雲終焉の地》(図26)が、「新宿区・レフカダ市 友好提携30周年記念」として、小泉八雲記念公園(東京)に設置された。高さは2.8メートルでハートの開口部から八雲の胸像が覗ける角度の設置は、松江の夕日が入るのと同じ発想であった。この友好提携は、ギリシャのレフカダ島で生まれた小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が、新宿区で生涯を終えたことに由来する。この新宿区小泉八雲記念公園の作品で4つ目となり、野田の八雲彫刻シリーズの最終章として完結したものとなった。

このように、2009年から2019年までの約10年間、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の縁の地、ギリシャのアテネとラフカダ、そして松江と新宿の4ヶ所にモニュメントを設置した。これらのモニュメント設置は、野田にとってハーンの足跡を点から線へ、線から面へと繋がりを持つことを実感させるものとなった。



(図26) 《無限の未来—小泉八雲終焉の地》 2019年

6. 国内でのモニュメントの展開

2011年3月、広島市現代美術館の彫刻公園に《疾風フラッシュバック》を設置するなど、広島県内をはじめ、国内でも公共モニュメントの設置が続いた。

同年4月、福山市立大学に装飾合わせガラスによる《進化》、《探求》を制作。これは、大量の小彫刻を連綿と複写したものをデジタルで再構成、フィルムに特殊印刷して最終的に2枚のガラスで挟み取り付けたものである。この一連の作品は、《覚醒-V》の手描き素描類がその表現の原形になっているが、写真、コンピューターグラフィックの領域とも近い関係にある。

2012年3月、福山駅南広場へ《いまこそ未来》(図27)を設置。鏡面仕上げのステンレス彫刻は、角度や天候、見る人の気持ちにより表情が大きく変わって見える。ある角度からは折鶴のようであり、また別の角度からは、風車のようであり、福山を象徴するバラのようでもあり、未来に向けて希望に満ち溢れた作品となっている。



(図27) 《いまこそ未来》 2012年

2016年、福山市かなべ市民交流センターの屋内

にある吹き抜けの壁面に、モニュメント《啓発》(図28)が設置された。福山市市制施行100周年記念のために依頼された本作は、モニュメントとして初の試みとなる壁面設置となった。縦横1.8×2メートル、奥行1.2メートルであり、ステンレスに金色と銀色の各々4枚を組み合わせて塗装した華やかなものでエネルギーの流動を表わしている。野田は、「作品を見た福山の人が、世界に発信できるような何かを持ってほしい」という願いを込めて制作した。作品のタイトルは、啓蒙・開化・開眼等の意味合いを持っている。福山が自発的、能動的な発展を続けてもらいたいという期待も込められている。



(図28) 《啓発》 2016年

2020年3月、福山市体育協会創立100周年記念のモニュメントとして、《栄光》(図29)がエフピコアリーナふくやま・福山市総合体育館の入口に設置された。タイトルは、「福山市が向かう未来は「栄光」に満ちている⁽⁹⁾」という願いを込めて名付けられた。高さは、5.7メートルあり、発案から3年間の月日をかけて完成させた。本作は、福山



(図29) 《栄光》 2020年

駅南広場のモニュメント《いまこそ未来》と南北で繋がる位置にあり、13作目となった。野田は、「アートを通じて世界との文化交流の場を培い、福山市の発展とともに、次世代への遺産として繋がっていくことを期待⁽¹⁰⁾」して制作した。台座は鋭角に仕上げられた三角錐の黒御影石で、その上に曲線とひねりで構成されたモニュメントが置かれている。体育館のモニュメントらしく、スポーツやレジャー、イベントなどを楽しむアスリートの躍動感を表現したもので、角度によって異なるイメージが見て取れる。

2022年5月、ホーコス株式会社社の創業80周年を記念して、新本社ビル1階ロビーに《超想》(図30)が設置された。サイズは長さが5メートル、縦横2.6メートルある。特筆すべき点は、天井から3本のワイヤーで吊るされた「空中彫刻」となっていて、壁面左右3個の変光ライトによって、7色の光に輝く演出を施したところである。



(図30) 《超想》 2022年

作品には、未来、限りない躍進に向かっている思いが込められている。作品には、流動するエネルギー、飛翔、反重力、螺旋にまつわる生命、DNAなどをモチーフにしている。本作は、空中彫刻にすることで、それらのイメージを強く表している。

2024年2月、《^{はやと}颯翔》(図31)は、キャステム株式会社の本社正面入口に設置された。このモニュメントは、高さ4.15メートルで、福山市内15ヶ所目の作品である。「栄光の未来へ向かってはばたけ」とタイトルの意図に相応しく、漆黒の黒御影石で作られた台座の上に鳥が翼を広げて飛び立つ一瞬を捉えたような形状をしている。本作は、2000年に国道486号線に設置された《飛翔Ⅱ 時空を超えて》と福山と府中間を結ぶ動脈の幹線道路で繋がっており、同線から24年間の野田のモニュメント作品における進化の状況を一望することができる。

同年9月に設置された《進化と革新》(図32)は、野田金属工業株式会社の設立50周年を記念して設立したモニュメントである。高さ6.64メートルは、福山駅前に設置した《いまこそ未来》の高さ7.14メートルにつぐ2番目の大きさである。本作は、野田相談役のモノづくりに対する精神を伝えたものであり、野田のモニュメント制作における新たな指標を示すものといえる。



(図31) 《颯翔》 2024年



(図32) 《進化と革新》制作中 2024年

7. むすび

このように、野田のモニュメントは、ニューヨーク、モンゴル、広島、福山、松江、大阪、京都、東京をはじめ、中国広州・深圳美術館やギリシャ政府直営の文化施設、デルフィ・ヨーロッパ文化センターなど重要なステージに設置されてきた⁽¹¹⁾。

これらのモニュメントは、国や市のランドマークとして永久的にその場所にあり続けるものであり、国境を超えた文化交流を長年にわたって続けていくことで、次世代への遺産として引き継がれていくことであろう。

野田のモニュメントの特徴は、磨き上げられたステンレス鋼であり、作品と鑑賞者、あるいは設置される空間との境界線を消し去っている。自然や建造物をも巻き込み、幾重にもねじったような、ダイナミックな造形が特徴といえよう。また、この鏡面は、まわりの空間を拡張していくかのような軽やかさを演出している。

野田が常々話すとおり、「制作の視点は、常に夢想空間を追求する画家であり、彫刻家としての造形感覚との融合⁽¹²⁾」を模索し続けている。それは、立体作品を制作するにあたって、「物理的な制約や素材に対する束縛から離れて、常に絵画表現の延長線上にあるということ意識して自由に制作したい⁽¹³⁾」という思いが根底にあり、野田のモニュメントの特徴であり、魅力の一つとなっている。また、日頃からモニュメント制作にお

ける、異業種とのコラボレーション、イベント、文化活動に傾注するなかで、その可能性を模索している。そのコミュニケーション能力は、作品を高みに押し上げるため、国際舞台で業界や異業種など、多方面の人たちとの交渉や接触などから磨かれてきたといえよう。近年でいえば、2022年に高梁市成羽美術館で開催された展覧会において安藤忠雄建築との競合は、新たな次元を切り開く試金石となったに違いない。

[付記]

本稿執筆にあたり、野田正明氏には、インタビューをはじめ助言と数多くの資料提供をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。

註

- (1) 以下、The New York Times 1982年10月17日(日)の記事原文
 Willem de Koonig will be at Central Park's
 Sheep Meadow at noon Saturday to join 11 other artists in a kind of air show of inflatable soft sculptures. His own contribution will be a 20-foot by 25-foot sky sail. The Rainbow Art Foundation is sponsoring the event. The other artists are Dolly Unithan of Malaysia; Marty Lowell, Vera Simons, Adger Cowans, Rick Kinnarid, Lyssa Papazaian and Peter Dean, all of the United States; Tarikh of India; Missaki Noda of Japan, and Lucio Isolani of Italy. The Sheep Meadow is on the west side of the park, north of the 65th Street transverse. ※野田正明の Masaaki が Missaki と誤植となっている。
- (2) このシリーズは、歪曲する放物線のような金属板の帯が、壁に直接設えたステンレス・スチール板の表面から立ち現れるように構成した造形が特徴。このタイトルは、金属の枠や表面の抑制からを完全に解放することを示している。
- (3) 1979年頃のシリーズは、当時のアート界でも絵画か彫刻かとの大物議を引き起こした。この頃は、ミニマリズムの影響が残っていたこともあり、絵画、彫刻の線引きがシビアであったが、野田氏は柔軟に取り入れた。
- (4) 守屋正彦『『アポロの鏡』、空間の指揮者』『野田正明展』図録 ふくやま美術館 2006年1月13日 154頁。守屋氏によれば「彼の彫刻は環境と共存するハーモニーを生み出した。空間のコンダクター、いわば音楽の指揮者のような彫刻、そのようなあり方を野田の表現と見做すことができる」とある。
- (5) 野田氏へのインタビュー取材により当時の回想を言葉にしたもの。
- (6) 野田氏によれば、福山市内をはじめ、大阪、京都市内数社を回って依頼。一部試作などを提示してもらったが、原型のイメージと全くことなるものであった。
- (7) 野田氏へのインタビュー取材により野田邦雄氏の言葉を回想したもの。
- (8) 野田邦雄「モノづくりは、自分づくりから」『野田金属工業株式会社設立50周年記念 進化と革新 彫刻モニュメント除幕式』パンフレット 野田金属工業株式会社 2024年9月21日
- (9) 「躍動感あふれる造形 福山新総合体育館で除幕」『山陽新聞』2020年3月4日
- (10) 野田正明氏除幕式でのあいさつの言葉、野田氏へのインタビュー取材による。
- (11) これまで設置されたモニュメントの地域別内訳は、福山市15ヶ所はじめ、広島市2ヶ所、大阪府3ヶ所、東京都・京都府・島根県それぞれ1ヶ所、ギリシャ4ヶ所、アメリカ2ヶ所、中国・モンゴルそれぞれ1ヶ所と国内外にある。設置場所も駅舎をはじめ、国道の交差点、公園、領事館、美術館、病院、大学、高校、保育園、体育館、公共施設・オフィスの屋内外などに設置されてきた。サイズも1メートル程のものから6メートルを超えるものまであり、大小さまざまである。
- (12)、(13) 野田氏へのインタビュー取材により、モニュメント制作にかかわる抱負を語った内容。

野田正明 年譜

[] 展覧会名・名称 / () 会場 : 会期・期間 / [] 開催地 / 《 》 作品名 / ○モニュメント / * 個展 / ※備考

西暦 (元号)	年齢	回	月日	項目
1949年 (昭和24年)			12月19日	広島県芦品郡新市町〔現・福山市新市町〕に、備後緋(のち縫製業)を営む父 實、母 澄子の長男として生まれる。
1968年 (昭和43年)	19歳		3月、4月	広島県立戸手商業高等学校(現・広島県立戸手高等学校)〔福山〕を卒業。 大阪芸術大学美術学科に入学。同大学では津高一、泉茂に師事。
1972年 (昭和47年)	23歳	*	1月、18月、3月、4月	「野田正明展」(信濃橋画廊)〔大阪〕で初個展(’75、’76、’77、’79、’80年にも同画廊にて個展開催)。 卒業を前に大学の津高一、泉茂、松井正ら教授陣、山中嘉一ら作家宅を作品持参で訪問し、美術家になるための指導を直接仰ぐ。 大阪芸術大学美術学科卒業。 洋画家、河野芳夫のアシスタントとなるほか、泉茂の版画の刷りを手伝う。住之江幼稚園、玉造絵画教室〔大阪〕の絵画教師を渡米まで勤める。
1973年 (昭和48年)	24歳	*	4月	「野田正明展」(画廊みやざき)〔大阪〕で個展(’74、’77年にも開催)。
1976年 (昭和51年)	27歳		1月、4月	「アート・ナウ ’76」(兵庫県立近代美術館)〔神戸〕に《Expression(表現)-103》他を選抜出品。 「第26回モダンアート協会展」(東京都美術館他)〔東京、京都、大阪巡回〕で《Expression-110 part-3》が大阪市長賞。
1977年 (昭和52年)	28歳		4月、9月2日	「第13回現代日本美術展」(東京都美術館他)〔東京、京都巡回〕に《Expression-87-A》を出品。 ニューヨークへ渡る。 ※同リーグでは、マイケル・ボンス・デ・レオン、マイケル・ベレティエリに師事。 12月、AAA(アソシエイト・アメリカン・アーティスト(アメリカ#1の版画画廊が最初の画廊として取り扱いが始まる。(ニューヨーク)
1978年 (昭和53年)	29歳		5月	「ニューヨーク・アートスチューデントリーグ版画展」(ダイヤモンド・ギャラリー)〔ミシガン〕に《Expression-78-F》を出品。
1979年 (昭和54年)	30歳		3月、5月7日-18日、9月	「第31回ボストン全米版画展」(フィッチバーグ美術館)〔マサチューセッツ・ボストン〕で《Dimension-6-J》が買上賞。 「東洋の窓 日本現代美術の概観」(世界貿易センター#1)〔ニューヨーク〕に《Expression-86-F》を出品。 《次元の位相》シリーズ(ミリアム・バールマンギャラリー)〔シカゴ〕へ出品。
1980年 (昭和55年)	31歳		3月、10月	マイアミ国際版画ビエンナーレ(メトロポリタン美術館とアートセンター)〔フロリダ〕に《Dimension-12-A》を出品。 フレッヘン国際版画ビエンナーレ(フレッヘンタウンホール)〔ドイツ〕に《Dimension-18-F》を出品。
1981年 (昭和56年)	32歳	*	6月15日-25日、9月	「野田正明個展」(ギャラリー・ル・コアン)〔大阪〕 アート・スチューデント・リーグ卒業。 この頃、西ドイツ(当時)ベルリンの画廊で個展の依頼があったが、アメリカでの永住権(グリーンカード)を申請中で国外へ出ることができなかった為、実現せず。ベルリンの画廊はじめ、ヨーロッパでも版画を販売。
1982年 (昭和57年)	33歳	*	5月、10月、12月	「野田正明シルクスクリーン版画展」(ACWLP ギャラリー)〔ニューヨーク〕アメリカでの初個展、この年シカゴなど3会場で個展開催。 「国際空中アートの交響(空中彫刻)展」(シーブメドウ・セントラルパーク)〔ニューヨーク〕で招待作家として《永久運動》を出品、彫刻に関わった最初のイベントでブラット大学で制作。 チャイナタウンのロフト(パウリー通り)からソーホーのロフト(ウエストブロードウェイ)へ転居。
1983年 (昭和58年)	34歳		5月、10月、10月	ペンシルベニア大学(グラフィッククラス)〔ペンシルベニア〕にて講演(’85、’87、’89年にも同大学で講演)。 「ニューヘブレン・ペイント&クレイ・クラブ・メンバー展」(ジョン・スレッド・エリイハウス)〔コネチカット〕で《Among the Moments 瞬間の間》が買上賞。 アメリカでの永住権(グリーンカード)を取得。

西暦	(元号)	年齢	回	月日	項目
1984年	(昭和59年)	35歳		3月、「第10回クラクフ国際版画ビエンナーレ」(ワースロー国立美術館) [ポーランド] に《通過 Passage》出品 ('86、'88、'94、'97、'00、'03年にも同展出品)。 4月、「第3回キャリア補助財団アート競作展」(キャリア補助財団) [ニュージャージー] で《瞬間の軌跡 Locus of Moment》が第2賞を受賞。 * 11月、「野田正明 水彩画とシルクスクリーン版画展」(ベル・アート・ギャラリー) [ニューヨーク] で個展 ('85年にも開催)。	
1985年	(昭和60年)	36歳		* 2月、「野田正明 シルクスクリーン、水彩、ドローイング展」(ギャラリー・ダウタウン) [テキサス] で個展。 * 4月、「野田正明 新作スクリーン展」(ヨウ・アート・ギャラリー) [大阪] で個展 ('86、'91年にも同画廊にて開催)。 9月、「第16回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ」(モダンギャラリー) [ユーゴスラビア] に《瞬間の間 Among the Moments》出品 ('87、'89、'91年にも同展出品)。	
1986年	(昭和61年)	37歳		* 3月、「野田正明 シルクスクリーン版画展」(ヒロ画廊) [東京] にて個展 ('91、'95、'00、'19年にも同画廊にて開催)。 4月、「全米アート版画展」(コロンビア美術館) [ミゾーリ] で《Confluence 合流》を出品、買上賞を受賞。 * 5月、「野田正明版画展」(天満屋福山店 モダンアートギャラリー:以後 '91、'00、'06、'14年にも、同店美術画廊) [福山] にて個展。	
1987年	(昭和62年)	38歳		* 9月、「野田正明 シルクスクリーン展」(ギルバート・ルーバー・ギャラリー) [フィラデルフィア] にて個展 ('90年にも同画廊にて開催)。	
1988年	(昭和63年)	39歳		* 7月、「野田正明 スクリーンプリント展」(ウェニガー・グラフィックス) [ボストン] にて個展 ('89年にも同画廊にて開催)。	
1989年	(昭和64・平成元年)	40歳		4月、「第16回国際ドッグウッド・アート展」(アトランタシアター・ジョージアテック学生センター・ギャラリー) [ジョージア] で《反響 Repercussion》が第1席受賞。 5月、「第11回国際展」(キャスティル・ギャラリー) [モンタナ] で《試み Attempt》が第2席受賞。 6月、「全米アメリカンミュージアムアートショー」(レーバーハウスギャラリー) [ニューヨーク] で《反応 Reaction》が栄誉賞。	
1990年	(平成2年)	41歳		* 10月、「野田正明 プリントとペインティング展」(シートン・ホール大学アート・ギャラリー) [ニュージャージー] にて個展。	
1991年	(平成3年)	42歳		10月、「第61回アメリカ版画協会展」(レーバーハウスギャラリー: '15年まで毎年出品、会場は毎回別) [ニューヨーク] に《回折 Diffraction》を出品。	
1992年	(平成4年)	43歳		2月から1995年2月まで、中国新聞に「ニューヨーク便り」を計27回寄稿。ロイ・リキテンシュタイン、ジェームズ・ローゼンクイスト、クリストラ著名なアーティストのスタジオでインタビューを行うなど独自に取材し、ニューヨークのアートシーンを紹介。 12月、「間にあって見えるもの 日、中、韓合同絵画展」(イセ・アート・ファンデーション) [ニューヨーク] に《間隙 Interstice》を出品。 ※同展は、'93年5月、(ふくやま美術館) [福山]、9月、(ウオーカー・ヒル・アートセンター) [韓国]、(ハワードサロン) [台湾]、'94年3月、(タイペイギャラリー) [ニューヨーク] 12月3日 - 1993年2月10日、SPF USA ギャラリーにて個展。[ワシントン DC]	
1994年	(平成6年)	45歳		1月、「第52回オーデュボンアーティスト展」(ナショナルアートクラブ) [ニューヨーク] に《切点 A Point of Contact》を出品。 ※同展には、'15年まで出品、会場は'99年より (サルマガンディクラブ) 5月、「抽象表現3X セオドロス・スタモス、ヤコブ・ビル、野田正明」(レ・サイクラデス・ギャラリー) [フランス] に《反射と結合 Reflection and Conjugation》、《偏光 Polarization》を出品。	
1995年	(平成7年)	46歳		* 7月、「野田正明 フォームと色彩の飛翔」(レ・サイクラデス画廊) [フランス・アンティープ] で個展。 * 12月、「野田正明 現実の抽象化」(ジョン・キャラハン・ギャラリー) [ボストン] で個展。	
1997年	(平成9年)	48歳	①	8月5日、《飛翔》(1階《去来、流転》、2階《天空昇》)(京阪電鉄宇治駅 南入口来迎壁) [京都] に大型ステンドグラス2点設置。	

西暦	(元号)	年齢	回	月日	項目
1999年	(平成11年)	50歳	*	6月、	「野田正明 絵画、彫刻展」(70th アート・ギャラリー) で個展 [ニューヨーク]。 9月、「第57回オーデュボンアーティスト展」(サルマガンディクラブ) [ニューヨーク] で《去来 Coming and Going》がジョンテラー・アームズ記念賞。
2000年	(平成12年)	51歳		1月、	「熱帯雨林・現代国際アーティスト展」に《反響 Repercussion》、《横の回折 Horizontal Diffraction》、《切点 Point of contact》、《透徹 Penetration》を出品。 ※同展は、2001年8月、(高雄市立美術館) [台湾]、11月、(タイペイギャラリー) [ニューヨーク]、2002年1月、(ラスベガス美術館) [カリフォルニア] に出品。 * 5月、「野田正明 ニューヨークの息吹」(ギャラリー・ファイン・アート) [大阪]、(アート・コム・ギャラリー) [大阪] で個展 ('01年にも開催)。 ② 5月19日、《飛翔Ⅱ 時空を超えて》(福山市新市町の福戸橋北詰) [福山] に新市ライオンズクラブ創立35周年を記念してモニュメント設置。
2002年	(平成14年)	53歳		4月、	「版画の1世紀展 アート・スチューデント・リーグ作家1901-2001」(UBS ベイン・ウェーバー・アート・ギャラリー) [ニューヨーク] に出品。 ③ 5月11日、《飛翔Ⅲ ドリームキャッチャー》(広島県立戸手高等学校) [福山] モニュメントをに設置。
2003年	(平成15年)	54歳	④	1月18日、	《飛翔Ⅴ リュミナリー》(神辺町ひらの保育園) [福山] にモニュメント設置。 * 5月、「野田正明 新作絵画と彫刻展」(アンドレ・ザー・ギャラリー) [ニューヨーク] にて個展。 ⑤ 11月12日、《飛翔Ⅵ 天空昇》(深圳美術館) [中国] にモニュメント設置。 * 11月、「日中平和友好条約締結25周年記念 野田正明芸術30周年展」(深圳美術館) [中国] にて開催。
2005年	(平成17年)	56歳	⑥	2月16日、	《アポロの鏡》をアポロ神殿に隣接する (デルフィ・ヨーロッパ文化センター) [ギリシャ] にアジア人初のモニュメント設置。 5月、「野田正明 彫刻、水彩、版画展」(アストロラボス・アート・ライフ・ギャラリー) [ギリシャ] にて開催。 * 2月、「野田正明絵画彫刻展」(デルフィ・ヨーロッパ文化センター) [ギリシャ] にて開催。
2006年	(平成18年)	57歳	*	1月13日-3月12日、「野田正明展 ニューヨークからのメッセージ」(ふくやま美術館) [福山] 回顧展を開催。 1月、「美術展 2006 『ima』 長崎カラ」(長崎ブリックホール) [長崎] に《兆候 Indication》、《瞬間の移動 Shift of Moment》ドローイング、《リュミナリー Luminary》彫刻を出品。 11月、「第16回 IFPDA 国際プリントフェア」(パークアベニュー・アーモリー: '15年まで毎年出品) [ニューヨーク] に《最前部 Farfront》、《過去投影 Retrojection》版画を出品。 11月、「芸術家代表作品展」(上海茂名画廊) [中国] に《進化・Ⅷ》絵画を出品。 11月、上海アートフェア(上海マート) [中国] に《アポロの鏡》彫刻、《進化》絵画シリーズを出品。	
2007年	(平成19年)	58歳	*	8月、「野田正明展」(アートフォーラム・サニギャラリー) [ギリシャ] を開催。 9月、「マイケル・ミカエリデス・野田正明展」(アートフォーラムギャラリー) [ギリシャ] 2人展を開催。 10月-11月、「サイモン・ガオン、アレックス・ザレンステイン、マイケル・エルキンソン、野田正明」(E デイビッドギャラリー) [ペンシルバニア] を開催。	
2008年	(平成20年)	59歳	*	2月、「野田正明個展」(ハワードサロン) [台湾] を開催。 ⑦ 3月27日、《超越境界》絵画、《追跡》、《サブライム》ガラス彫刻(学びの館ローズコム 福山市中央図書館) [福山] を設置。 12月、「沈黙の対話」(ギリシャ・アメリカン大学) [ギリシャ] に《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》初期モデル彫刻はじめドローイングを出品。	
2009年	(平成21年)	60歳		4月、「ラフカディオ・ハーンとギリシャ、もう一つのルーツと受け継がれる精神性」(小泉八雲記念館) [島根] にラフカディオ・ハーンの前彫モデルを出品。 ⑧ 10月13日、《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》(ギリシャ・アメリカン大学) [ギリシャ] モニュメント設置とともに同名の展覧会を同大学にて開催。 * 10月-12月、「野田正明展 12神と詩」(ギリシャ・アメリカン大学) [ギリシャ] に《ギリシャ12神》ドローイング12点を展示。 ⑨ 11月26日、《創生》(ふくやま美術館 東側 噴水前広場) [福山] モニュメントを設置。 * 11月、「野田正明展 「アートはコミュニケーション」」(ギャラリー菊) [大阪] にて個展。	

西暦	(元号)	年齢	回	月日	項目
2010年	(平成22年)	61歳		5月、「アテネ国際アートフェア」（フェイロ パビリオン）[ギリシャ] に《アポロの鏡》彫刻を出品（以後同フェアに'15年まで出品）。	
				8月、「ラフカディオ・ハーンの開かれた精神」（レフカス文化センター）[ギリシャ] に《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》モデルを出品。	
			⑩	9月10日、「マラソンの闘い2500周年」を記念してマラソン市の依頼で《ヘルメスの精神》（マラソンスタジアム）[ギリシャ] モニュメント設置。	
			*	9月、「野田正明 神と神話展」（マラソンスター展示センター）[ギリシャ] を開催。	
			⑪	10月10日、《小泉八雲の開かれた精神》（宍道湖畔）[島根] モニュメントを設置。	
				10月、「造形美術展」（松江城・本丸）[島根] に《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》を出品。	
2011年	(平成23年)	62歳	⑫	3月26日、《疾風 フラッシュバック》（広島市現代美術館）[広島] モニュメントを設置。	
			⑬	4月4日、《進化》、《探求》（福山市立大学）[福山] 装飾合わせガラスを設置。	
				6月-12月、「小泉八雲のKWAIDAN-怪談-展」(小泉八雲記念館)[島根]に《クワイダン》彫刻を出品。	
				※同展は、'12年4-10月、(焼津小泉八雲記念館)[静岡]、'13年2月、(池田記念美術館)[新潟]を巡回。	
				8月、「小泉八雲「怪談展」」（島根大学付属図書館）[島根] に《クワイダン》彫刻を出品。	
				7月-8月、「開館3周年事業「小泉八雲・野田正明 開かれた精神」(福山市中央図書館)[福山]を開催。	
2012年	(平成24年)	63歳	⑭	3月29日、《いまこそ未来》（福山駅前南広場）[福山] モニュメントを設置。	
			⑮	11月29日、《セレンティー》モニュメントならびに《再生》、《永遠の共鳴》装飾合わせガラス（このころの病院）[福山] を設置。	
2013年	(平成25年)	64歳		3月-4月、「第80回アメリカ版画協会メンバー展」（アート・デリンドギャラリー）[ウイスコンシン] で《範囲 Hemisphere》が買上賞。	
				7月-11月、「信濃橋画廊コレクションを中心に、2013年度コレクション展」（兵庫県立美術館）[兵庫] に《一致-17 Accordance-17》を出品。	
				8月、「小泉八雲「怪談展」」（島根大学付属図書館）[島根] に《クワイダン》彫刻を出品。	
2014年	(平成26年)	65歳		5月10日-6月27日、「ロバート・クック、野田正明 彫刻とドローイング」（オールド・プリントショップ）[ニューヨーク] にて2人展を開催。	
				6月-9月、「第15回国際小版画トリエンナーレ」（ビラギャラリー）[ポーランド] に《上昇 Upsweep》、《過去投影 Flash Back》を出品。	
				7月、「ラフカディオ・ハーンの西から東への知的旅程」（ギリシャ・アメリカン大学）[ギリシャ] に《ヘルメスの精神》、《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神》彫刻、同タイトルのドローイングを出品。	
			⑯	7月4日、《ラフカディオ・ハーンの開かれた精神のオデュッセイア》（ラフカディオ・ハーン歴史センター）[ギリシャ] モニュメントを設置。	
				12月、「INK マイアミ アートフェア」（ドーチェスタースイーツ、マイアミビーチ）[フロリダ] に《上昇》、《ヘルメスの精神》彫刻、《誘導》、《至近距離の反射》版画を出品。	
			⑰	2月、《探求-N ² 》（野田金属工業株式会社）[東大阪] モニュメント設置。	
2015年	(平成27年)	66歳	⑱	2月25日、《光彩》（ニューヨーク日系人会）[ニューヨーク] モニュメントを設置。	
			⑲	4月6日、《無限の可能性》（シギヤ精機製作所）[福山] モニュメントを設置。	
				5月、「海を渡ってきた日本人芸術家達：第2弾 啓発と探求の日米交流 1960-1970」（日本ギャラリー）[ニューヨーク] に《進化・螺旋の交合Ⅱ》絵画を出品。	
				6月、「ラフカディオ・ハーンの日」（ラフカディオ・ハーン開かれた精神のオデュッセイア）を出品。	
				11月、「抽象の原理」(レラックコンテンポラリー・イザベラ・ガルーチョ ファインアート)[コネチカット] に《創生》、《ヘルメスの精神》、《サブプライム》、《リュミナリー》彫刻他、ドローイングを出品。	
			*	11月21日、「世界をつなぐ野田正明のアート」（沼隈図書館ギャラリー）[福山] にて個展開催。	
2016年	(平成28年)	67歳		2月、「ギリシャ文明とマラソン展-古代から現代への懸け橋-、第3回 国際文化紹介展」（港区役所）[東京] に《ヘルメスの精神》彫刻を出品。	
			⑳	6月19日、《啓発》（福山市かなべ市民交流センター）[福山] モニュメントを設置。	
				9月7日-12月18日、秋季所蔵品展「野田正明の世界 ニューヨークから世界へ」(ふくやま美術館)[福山] を開催。	

西暦	(元号)	年齢	回	月日	項目
2017年	(平成29年)	68歳		5月1日、春の叙勲 紺綬褒章受章。 10月12日、オーデュボン・アーティスト協会、アートタイムス賞、ニューヨーク AD賞 [ニューヨーク] 10月20日、ニューヨーク・アメリカ版画作家協会、名誉賞受賞。100年の歴史で初のアジア人受賞 11月30日、第38回広島文化賞受賞。	
2018年	(平成30年)	69歳		2月23日-4月1日、「大きな世界を求めて：日本人アーティストとニューヨーク 1950年代から現代」ホワイトボックス [ニューヨーク]。 * 10月10日-24日、「螺旋の交合 1995-2018」(ニューヨーク・ギリシャ総領事館) [ニューヨーク]にて個展を開催。 ㉑ 11月29日(天啓) YHRP ミュージアム、広島大学病院 [広島] モニュメントを設置。	
2019年	(平成31年・令和元年)	70歳		㉒ 5月23日、《大志》(盈進中等学校) [福山] モニュメントを設置。 ㉓ 10月21日、《無限の未来ー小泉八雲終焉の地》(新宿区小泉八雲記念公園) [東京] モニュメントを設置。 ㉔ 2月13日、《上昇》(ニューヨーク・ギリシャ総領事館) [ニューヨーク] モニュメントを設置。	
2020年	(令和2年)	71歳		㉕ 2月22日、《新風》(大木建設株式会社) [福山] 彩色壁面彫刻モニュメントを設置。 ㉖ 3月1日、《栄光》(エフピコアリーナふくやま・福山市総合体育館) [福山] モニュメントを設置。 ㉗ 3月28日、《無限の未来》(在大阪ロシア連邦総領事館) [大阪] モニュメントを設置。	
2021年	(令和3年)	72歳		3月1日-6日「アートフェスティバル」(ギリシャ・アメリカン大学) [アテネ、ギリシャ] に出品。 11月25日-28日、「テッサロニキ・国際アートフェア」(議会センター) [ギリシャ] に出品。 ㉘ 11月15日、《希望のベガス》(モンゴル国国立大学総合病院) [ウランバートル、モンゴル] モニュメントを設置。	
2022年	(令和4年)	73歳		㉙ 5月20日、《超想》(ホーコス株式会社) [福山] モニュメントを設置。 * 9月17日-12月18日、「野田正明 50年の軌跡ーニューヨークから世界へー」(高梁市成羽美術館) [岡山] を開催。	
2023年	(令和5年)	74歳		* 9月20日-26日、「野田正明展 ニューヨークから世界へ アートは時空を超えて」(山陽百貨店) [姫路] を開催。 10月27日、ギリシャ大統領より「名誉勲章金十字章」を授章。	
2024年	(令和6年)	75歳		* 1月20日-3月10日、「ニューヨークからのエアーメール」(福山市しんいち歴史民族博物館) [福山] にて個展を開催。 ㉚ 2月29日、《颯翔》(キャストム株式会社) [福山] モニュメントを設置。 * 8月21日-9月16日、「半世紀のニューヨーク・野田正明のせかいー過去、現在、未来ー」(福山市東部図書館) [福山] にて個展を開催。 ㉛ 9月21日、《進化と革新》(野田金属工業株式会社) [東大阪] モニュメントを設置。 9月26日、「ギリシャと日本の絆：ラフカディオ・ハーンから東慶丸へ」(デモスセンター) [アテネ、ギリシャ] に彫刻《ヘルメスの精神》を出品。 * 10月25日-11月4日、「うみとそら」(カフェうみと) [福山] にてガラス作品を特別出品。	
2025年	(令和7年)	76歳		1月3日、オーデュボン・アーティスト協会 [ニューヨーク] シルバーメダル賞を受賞。 5月14日-19日、「ニューヨークから福山へ・福山から世界へ」(美術画廊・福山天満屋) [福山] にて個展開催予定。 6月10日-16日、日本国際博覧会(大阪・関西万博) 大阪ヘルスケアパビリオン《超想》出展予定。	
現在				所属NPO団体 オーデュボン・アーティスト協会、版画部門ディレクター [ニューヨーク] アリード・アメリカン・アーティスト協会、平面部門委員 [ニューヨーク] AHEPA (アケバ) ギリシャ協会会員 [ニューヨーク]	

参考文献

- ・『野外彫刻－オブジェと環境』鹿島出版会 1985年2月25日
- ・『日本の彫刻設置事業 モニュメントとパブリックアート』公人の友社 1997年7月31日
- ・『広場の芸術 パブリックアート〔記録〕1977-1992』日貿出版社 1998年7月15日
- ・『パブリックアートについて語り合う』中央公論美術出版 2014年9月30日
- ・『彫刻の教科書 わからない彫刻 みる編』武蔵野美術大学出版局 2024年3月25日
- ・『野田正明作品集 Masaaki Noda The Works in New York 1980-1991』阿部出版 1991年9月9日
- ・『日中平和友好条約締結25周年記念 野田正明1973-2003』深圳美術館 2003年11月12日
- ・『野田正明 ニューヨークからのメッセージ』ふくやま美術館 2006年1月13日
- ・『野田正明：ラフカディオ・ハーンにまつわる造形表現の一考察』『ふくやま美術館・ふくやま書道美術館 研究紀要 第8号』ふくやま美術館 2017年2月28日
- ・『野田正明とニューヨークのアーティストたち』『ふくやま美術館・ふくやま書道美術館 研究紀要 第11号』ふくやま美術館 2023年3月31日
- ・『野田正明 50年の軌跡 -ニューヨークから世界へ-』高梁市成羽美術館 野田正明 2023年11月1日

